旧甲州街道ぞいにあるく

甲州街道の起こり

甲州街道は、はじめ甲府海道と呼ばれ、江戸城が万一攻撃を受けた場合、一時将軍が甲府に退去して、甲府城（躑躅城）を幕府の拠点として天下に号令しようと、非常時に備え、非難路として開設された。

これより先、中世戦国期には、急峻な笹子峠や小仏峠は、軍路として開削されず、脇道として笹子峠は田野から破魔射場、小仏峠は案下道を甲斐から武蔵国に向かう要路としていた。

しかし永禄12年（1569）郡内小山田信茂が率いる甲州軍団が、はじめて小仏峠を強行突破して、八王子滝山城にこもる北条氏照を攻略し、大勝を喫して以来、はじめて甲州道が全面開通したと伝えられる。

その後、徳川家康の命により、慶長７年（1602）正式に官道として整備がすすめられ、つづいて慶長９年(1604)には公用人や商人、信仰者など旅人の休息と里程の目安として、一里塚の建設がはじめられるなど、街道整備が本格的に行われ、この事業は約１００年後の７代将軍吉宗のころ、ほぼ完備されたという。

正徳６年（1716）甲州街道は、江戸日本橋を起点として、中山道の下諏訪にいたる５３里２町（約213km）の幹線道路となった。

延宝１年（1673）には３５宿（新宿）高井戸（上、下）（国領）布田（上、下）（石原上、下）府中、日野、横山、駒木野、小仏、小原、与瀬、吉野、関野、上野原、鶴川、野田尻、犬目、鳥沢（上、下）猿橋、大月、花咲（上、下）初狩（下、中）白野（阿弥陀海道）黒野田、駒飼、鶯瀬、勝沼、栗原、石和、甲府、韮崎、台が原、教来石、蔦木、金沢、上諏訪であったが、元禄１２年（1699）には４５宿（カッコ内）と増えた。

江戸と甲州を結ぶ主要道路として、一般の人はもとより、幾多の文人、墨客、学識者、著名な芸能人が行き来し、文化の導入や特産品の搬出の産業道路、氣光や富士、身延、善光寺三十三番巡礼詣りの信仰、巡礼道などに広く活用された甲州街道は、いくつかの時代を送り迎え、変遷を重ねた。

諏訪から恋塚まで、わずかに残る史跡をたどりながら歩いてみたい。

1　諏訪番所跡

1　由来

諏訪は、相模（神奈川県）の国から甲州街道沿いに、甲斐（山梨県）に入って最初の地で、上野原町の最東端にある。

諏訪番所は、境川番所、境川口留番所、諏訪関所などとも呼ばれた。設置した時代は明確ではないが、武田氏が北条氏と争いをした戦国時代の前期である。記録には天正10年(1582)徳川家康が出した書状のなかに、信玄時代と同様に国境の警備をするように申しわたされている。また、武田氏の時代、甲州25関の一つにかぞえられていた。

宝永4年(1707)、秋元氏の所領の時、諏訪神社付近から台地の東端に移された。寛文9年(1669)の検地には、屋敷1畝28歩、高2斗3升2合、畑2畝歩と記録されている。

番人は、役人1人、雑役に従事する農民1人が常時詰めており、有事の際は近隣の各村から臨時に応援が来る仕組みになっていた。明治維新の動乱時期には、定番9人、獄舎取締り1人がつとめていた。

2　経過

明治2年、長いあいだ続いていた本来の番所の任務はおわり、その後は物品の改めだけをしていたが、ついに明治4年に廃止された。

明治13年6月、明治天皇ご巡幸の際には、ご休息、お召替え所になった。建物は山内氏が買取り、その後山内氏から東京の渋沢氏が買取って飛鳥山に移築した。さらに伊豆方面に売られたがその後の消息はわからない。建物は間口7間半、奥行き4間の平屋建てであった。番所に残っていた多数の古文書は、中央大学文学院図書室に保存されている。

2　塚場一里塚

1　由来

徳川幕府の一里塚築造は、慶長9年（1604）家康が子の秀忠に命じたもの。

一里塚は、日本橋を起点にして５街道の１里ごとに、目印のために作られた塚のことで、道の両側に土を盛って、５間四方の小高い塚を築いた。また塚の上に榎、松、けやき、モミなどが植えられた。当時は、人夫や馬を借りるものが駄賃をはかる基準にしたり、街道を行き来する旅人が、距離を知るのに目安とした。とくに夏の炎天下に長旅をしたとき、ひと休みするのによい木陰になったり、にわか雨のとき、格好の雨宿りの場となった。

町内の甲州街道にも、塚場のほか大柵（九沓平）、荻野（平松西久保）、恋塚（塚の沢）の4ヵ所に一里塚の跡がある。

塚場の一里塚は、日本橋から数えて18番目、18里の位置で、この塚に植えられた木はカヤの木だったようである。荻野と恋塚の木は松だったようであるが、大柵の木は何であったか不明である。

36町１里に統一されたといっても、街道筋にはいくつかの除け地があったようで、それは距離に算入せず、逆に坂道や難所のあるところは、多く見積もって里数を出したので、同じ一里でも長短の差があった。

3　上野原宿の市場

1　由来

上野原宿の市場は、江戸時代の寛保2年(1742)にはじまり、明治40年(1907)に閉鎖された。宿内６市場に区分し、新一は１･６日市場、新２は1日市場、新３は２６日市場、本一は１１日市場本２は２１日市場、本３は６日市場というように１･６の日に市がたった。

市では絹、紬、糸、繭、荒物、その他日用品が売られた。

とくに農家が農耕のかたわら、家内工業的に織った絹、紬類は、近隣の農家の唯一の現金収入のもとになり、盛んに売買されて、この地域の主な産業になった。

この市には八王子方面からたくさんの仲買い人がはいり、かなりの賑やかさであったが、これら商人と、市に出かけてくる近在の人たちの、昼食の代りになったのが、今も町の名物として残る「酒まんじゅう」である。

現在も７軒の店が酒まんじゅうの製造販売をしており、素朴で自然な味は、町の内外の人たちの変わらぬ支持を受けている。

2　宿の形態について

普通の宿は２列の家並からできていて長く延びている。上野原宿では明治初年ごろまで２列の家並であった。

宿内は一般には通路幅は約４間（7,3m）程度で、この広さは両側に市日の露店設置が可能なように、また非常の場合の人馬の集合を予想したとも考えられる。道路の両側、または片側に流水を通して、馬の飲み水、その他雑用に供していた。（上野原宿では流水がなく呼び水を使用していた。）

宿の出入り口は木戸を設け、開閉をしていた。西の端には高札場が設けられ宿の入口は、４宿とも街道から直接宿内が見通せないよう鍵（かぎ）形に曲げてあった。

4　本陣と脇本陣

元来、本陣とは一亨の将が在営している場所をいった。したがって、はじめは本陣が一定していたわけではなく、その宿駅のなかでもっとも上等のものを本陣にあてていたのが、やがてその家自体を「本陣」と呼ぶようになり、戦国時代末頃から休泊施設（旅館など）を本陣というようになった。

保土ヶ谷経部文書に「寛永年中から、大名宿というのをやめて、本陣と唱えるようにいわれ、それから本陣の名目ができた。」とあるが上野原町内本陣設置の時期については明らかでない。

本陣は、おもに武士階級の休泊に応じた旅館であるが、このほか言家、公卿、高僧その他の貴人の休泊にもあてられたので、その規模は広大に構成され、家屋の構造にも共通性があった。原則として玄関、書院および上段の間、二の間、三の間があり、この点で一般旅籠屋などとはいちじるしく性質を異にしており、門を構えているものも多かった。

江戸中期以降、諸公の財政窮乏による倹約や、経営維持費の増大などにより、本陣は窮乏にあえぎ、衰亡の一途をたどることになる。明治３年（1870）10月5日、各駅ともに本陣、脇本陣が廃止になった。

脇本陣は、本陣ほどの従属性はなく、平旅籠（はたご）的性格が強かった。

- 犬目宿　（本陣１，脇本陣１）
- 野田尻宿（本陣１，脇本陣１）
- 鶴川宿　（本陣１，脇本陣１）
- 上野原宿（本陣１，脇本陣４）

5　藤川の川越

1 藤川の地形

・藤川断層線に沿う断層谷を形成する河川で、谷巾は広く、また浅く、上野原段丘の低位部段丘を構成する。河川延長約25キロメートル、河川勾配平均3,9%、流域面積70キロメートルで上野原町部落の62.2%が立地する。

・藤川橋付近の地形

上野原宿側は中位部段丘崖が川谷に入り、河川の侵蝕も大きい。藤川宿は低位段丘面を形成し、現在水田地帯である。このため、流線部の変更は頻繁にあることが予想される。ちなみに昭和28年から、橋の下流付近で、水位は3.5メートル低下したと観察される。

2 川越の意義

・藤川は、甲州街道唯一の川越河川である。

・川越は、大河川で架橋不可能

急流河川で暴れ川の様相を呈する場所

政治的に架橋を不可とする場所

等の理由で実施されるが、藤川の場合は、急流河川であること、政治的なことがあってのことと思われる。

3 川越の場所

現在の藤川橋のやや下流であったろうと予想され、定説になっている。

4 その他

玉川、笛吹川は渡船で渡ったらしい。

藤川の渡しは、あまり評判がよくなかったようで、旅人にとっては諏訪番所は手形で通過できても、この川越えについては簡単にいかず、番所役人よりも、川越え人足のほうがこわかったらしい。

岡十郎一座に対する、川越え人足の仕打ちのひどさについても、逸話が残っている。

岡十郎の祖は、武田の家臣堀越氏である。主武田家に謀反し、滅亡に導いた小山田氏を題材に「謀反人小山田」の芝居興業を打つため度々来甲し、藤川宿を通過した。

藤川の川越え人足は、小山田時代の子孫の若者である。岡十郎の芝居興業を不倫快に思う川越え人足が、岡十郎一座を川に投げ込んだり、高い人足代を請求したわけである。

6　鵜川宿

1 特色　鵜川宿は中世以来の聚落で、一村一宿（村のほとんどが宿屋を経営していた）の形態。正徳３年（1713)宿を構成。

天保14年（1842)　戸数57　人口295

本陣１　脇本陣２　旅籠上３，中３，下２計８

2 遺構等

・本陣　現在旧跡なし

・問屋　屋号笹屋・脇本陣をも努める。間口24間、奥行き18間、当時西街道筋にある。間数、建築様式等不明であるが「上段の間」はあった模様。大正10年の大火後間口を半減、南向きにして現在に至る。

・理法時　元亨元年（1558)創立、当時は東岸寺の名称で本堂があり、墓山は墓地、江戸中期以降の墓石が多い。境内に石塔(寛政9―1798)万霊塔、地蔵尊、印塔(宝暦年間―1751～1763)その他がある。道筋の入口に万霊塔（天明5年―1785)念仏供養塔(元和6年―1686)がある。

・鵜川神社（牛頭神社）　寛文元年（1661)勧請、京和２年(1802)の棟札あり。本殿の彫刻は町内三大彫刻の一つといわれる。

・若松屋　江戸時代の旅籠の一つ。馬宿も兼ねたといわれる。現在も当時を模した建築様式を整えている。

・方形積み石塚　理法寺の裏手にある。古代における帰化人の墓といわれる。数基あったが現在は２基のみ残る。

・古道　中世においては、新田倉―寺子沢―鵜川に道があり、東には城地区―鳥居前―関山を経て諏訪に、西には野田尻―柵頭―浅川峠を経て七保に通じていたといわれ、これを鎌倉街道または小田原街道と呼んでいたらしい。

7　大柳一里塚

1形態

・江戸日本橋から19番（19里）を示す。旅人の里程の目安であり、かつ休息の場所でもあった。目印のため必ず木を植えた。ここ大柳一里塚の木は何であったか不明である。木は木影をつくり、休息の場もつくる。また水の取得場をも有するので、地積としては相当な広さをもつものと思われる。

2位置

・明確には確認できないが明治天皇ご巡幸（明治13年―1880）の際の絵図に描かれているので、位置はこれを基準に定めた。

・明治21年（1888）の地形図によれば、甲州街道は、上野山から小さい沢を登り、舌状地帯を横断して鞍部をそのまま大柳部落に入っている。この付近から現在の道でなく台地を通っていたもののようである。

・ということから、大柳の台端にあったと想像される。

（参　考）蓋ヶ崎古戦場

この付近を蓋ヶ崎と呼んでおり、「甲斐国志」によれば、古戦場であったとされているが、いつ、誰と誰が戦ったのかは不明である。史上に残るこの付近の甲州対相州、武州の合戦は、古郡合戦（建保2年―1214）上杉禅秀の乱（応永24年―1417）足利持氏の遠征（応永33年―1426）太田道灌の乱入（文明10年―1478）武田信虎の侵攻（大永4年―1624）北条氏綱の乱入（享禄3年―1530）である。そのなかのいずれか、あるいはその他記録にない合戦か。

8　大柵部落

1部落の性格

・敏達帝14年(5世紀)に「氣音堂」が大柵に創建されたといいつたえられる。

・中世あるいはそれ以前に集落構成があった。

・桂川高位段丘上にあり、舌状地形の中央にある部落

・日野を経て仲間川流域に、また仲山、八ッ沢両部落への道を擁し、東西に古くからの幹線道路を有する交通上の要点。

2「間の宿」

・大柵は「間の宿」としての役割を持つ、街道筋の密集部落で、「宿」と異なり助郷役。

・中世および中世以前からの集落か、あるいは自然発生部落か、または街道の設置に伴って集落を構成したのか。(諏訪、塚場、大柵は前者で、新田は後者の性格を持つ。)

3遺構

・一里塚	前述
・廿三夜	(寛政12年ー1800)
・念仏供養塔	(文政2年ー1819)
・大乗妙典供養塔	(明和4年ー1767)
・秋葉山常灯	(安永6年ー1777)

9　長峰の砦

1由来

蓑ヶ崎から矢坪坂付近までの丘陵を、長峰と呼んでいた。この付近は北条氏と武田氏が、小競り合いをした中世の古戦場であった。甲鑑に「加藤丹後守景忠長峰の砦をも保護して、相州津久井口に備う。」とある。

蓑ノ巣近くに造られた砦は、丘の上の平坦地にあって、北は仲間川に面する崖となり、それをさらに削って堀切にした。南面には陣門と呼ぶ木の柵をたてて守りを固めた。

いまでもこの付近に、陣門、出口、殿の井戸などという地名が残っている。また砦の東側下方に濁り池があり、常にに水が濁り、菱が生えていた。この池はいかなる日照りの時でも、涸れることがないといわれていた。

現在、この史跡の真中を中央自動車道がとおり、濁り池も消失して跡形もない。かたわらの林の中に、芭蕉の句碑が残っている。

明治13年、明治天皇ご巡行に随行した池田香穂の紀行文「美登毛能数」につぎのような文がある。

「こは所々に小坂あれば也とそ　すこしゆけば長峰というところにて　ここは峰のいただきに路つきたり。

くるまの道の果と長峰の

ながくや君をかけて待ちけん

ゆきゆきて濁り池というあり　そのあたりおかしき松おおく生えて　けしき殊によし　とりてのあとあり　むかし武田氏の小山田某が築きしものなりとそ……」

2特徴

・水の存在

・交通の集約地帯

・相州に対する防御帯

3その他

・句碑

古池や蛙とびこむ水の音　　芭蕉

あがりてはさがりあげては夕雪雀　　蓼二房（各務支考）

・甲州道中の休息地

１０　西光寺

１由来

天長元年（824)真言宗派の寺として創立。鎌倉時代に臨済宗に転宗。建長寺９代菅長を本寺より派出する。往時は1万２千坪の境内を有し、末寺９つを有する地域の小本山。

平和中学校建設、中央自動車道の工事で、昭和40年現在地に移転。甲州八十八ケ所霊場、第7番札所、また甲斐国氣音第31番札所であった長峰山長福寺をも合併している。本山は鎌倉の巨福山建長寺である。

２境内構成

1　庫裡
2　本堂
3　落成記念碑
4　聖氣世音虚空蔵菩薩
5　石製山門
6　木製山門
7　南無本尊虚空蔵菩薩碑
　（甲斐国７番札所）
8　供養塔
9　地蔵尊
10　御膳水
11　鐘楼堂

３遺構等

・長峰の鍔口（大永5年ー1525)
・板碑
・山岡鉄舟筆「御膳水」

１１　荻野一里塚

１性格

・江戸日本橋から20番(20里)の一里塚

・自然の地形を利用した一里塚である。

・目印の木は「松」

２形態

・南側は現在半分は道路拡張時削られる。

・北側の丘はそのまま残るが、はっきりした形ではない。

３一里塚の使命

・目印であること

・遠くから見えること

・休息所としての条件を備えていること。（日陰、水）

（塚場一里塚、大橋一里塚の項参照）

１２　矢坪坂古戦場

１合戦の記録

長峰の道を西に進み、矢坪にでてさらに坂を上ると新田に至る。この矢坪と新田の間の坂を矢坪坂（箭壹坂とも記された）といい、むかし古戦場であった。

享禄３年（1530）４月、相模国の北条氏綱の軍勢が甲斐に攻め込み、矢坪坂に進んだ。一方、小山田越中の手勢が坂の上で待ちかまえ、両者は坂をはさんで対峙し、やがて激戦が展開された。このあたりは、南西に切り立った崖と、北面に山腹道を臨む道が入り組んでいる要害の地である。北条氏の手勢２万、小山田勢わずか４百、多勢に無勢、戦いは決して小山田勢の残兵は、富士吉田方面に逃げたという。

２矢坪坂の地形

隘路、狭隘、沢が深い。一本の山腹道があるのみ。

３その他

古書（甲斐国志）に曰く、「矢坪坂の合戦で吉田家打負、討死……軍勢権現箭壹村、丹誠権現ヘビキ村にあり、何神たる事不詳。けだし戦争のとき祭りし神なるべし」と。

（箭壹村―矢坪　　ヘビキ村―新田）

池田香蓮の「美登毛能歌」には「矢壹坂なといえる坂ありけり。けはしとにもあらねど、さらにやすからず。この矢壹坂は享禄３年、小山田と北条と戦いし所なり。」としるしてある。

１３　座頭ころがし

１形態

・矢坪部落から新田部落までの山腹道

・沢が深いため、沢頭をまわった道をつけ、これを「座頭ころがし」といった。

・道幅３尺あるいはそれ以下の細い道であった。

２その他

・広重甲州道中記に

「……四日　晴天　野田尻を立ちて犬目にかかる。此坂道富士を見ていく。座頭ころがしといふ道あり、犬目峠の宿しがらきといふ茶屋に入る……」

（参　考）

荻野、矢坪両部落は、戦国期の戦場であり、江戸時代街道設置後に街道沿いに集落を形成したもので「間の宿」である。

１４　新田部落

１部落の構成

・　慶長年間甲州街道開設に伴い、南方約１㎞の谷後、日留野部落より移住して部落を構成、南面したゆるやかな斜面一帯を耕作した。（ヘビキ村と称した）

・　尾張大納言御常宿が設置され、「向い」「前」等の屋号を持つ家があり、格式の高い町並みを構成した。

・　道幅は６尺あり、御常宿の前のみ９尺あった。

２遺構等

・　かじ屋

約250年前(享保年間)京都から刀鍛冶が来村、刃渡り2尺4寸の名刀をつくった。（1振現存か）　その後農機具をも製作した様子である。昭和50年頃まで土蔵(3間×4間)、物置、馬小屋(2間×5間)等を含む農家であったが、現在は建て替えられている。

・　尾張大納言御常宿（現在の屋号「大屋」）

長屋門を有し、本宅、土蔵その他の建物があり、当時の什器、文書等がいまも保存されている。

（参　考）

新田部落の姓名（世帯数の割に異なる姓名が多い。）

森屋（3）、米山（2）、甘利、坂本、伏見、鈴木、志村、大神田、清水

１５　犬目

１特色　　１村１宿　正徳3年(1713)宿を建成。それまでは犬目の下方700mの土橋に集落があったといわれる。宿駅起立の際、統一的意志により創設された宿であるといわれ、宿以外の家数はわずか５軒であった。

天保14年(1842)戸数56　人口255

本陣1　脇本陣1　旅籠大3　中5　小7　　計15

２　遺構等

・宝勝寺

伊豆最勝院の流れをくむ曹洞宗系。天和元年（1618）開山、甲州八十八霊場第6番札所でもある。

・犬嶋神社

勧請、建立は不詳。石燈は寛政3年(1791)作

３　その他

「郡内騒動の兵助について」

兵助は犬目の水田屋で生まれた。郡内役所の手代を勤めていた模様で

天保騒動については、発起人武七（現大月市下和田）が親類にあたり、武七から国中の富豪に米を借りにゆく相談を受けた。兵助はただちに賛同し、武七の手足となって行動を開始した。(天保7年8月17日)農民約10農民約100人を白野宿(現大月市笹子)に集めて出発する。しかし、笹子峠を越えてから様相は一変し、主旨に関係なく、国中人が入り乱れて暴動化、騒動となる。

この郡内騒動は、甲州一円にわたる大騒動に発展し、一時国中平野は無政府状態となる。意に反した成り行きに、兵助は失意のうちに郡内に帰る。一揆首謀者として手配され、武七は自首、兵助は妻を離縁して逃亡の生活に入る、。岳父に入り、以後高崎、長野、直江津、富山、金沢、敦賀を強行軍で歩き、さらに由良、宮津、岡山を経て小豆島に渡り、四国を巡礼。広島、岩国に行き、引き返して高野山に入る。奈良、京都、宇治山田まで行く。その後千葉の木更津に移り住み、妻子を呼び寄せて寺子屋をして暮らす。維新後帰村し、明治2年に没したといわれる。

兵助はもともと「水越」を名乗っていたが(「おもだかや」の分家)、逃亡後木更津に住みついて「奈良」の姓に変えたと言われる。

現在の水田屋の戸主奈良尚文氏は、兵助から6代目になる。

１６　恋塚一里塚

21番21里の一里塚

当時この地の地形を生かして、小高い場所をそのまま塚とした。現在も南側のみほぼ完全な形で残る。

町内の四つの一里塚のうち、形をとどめているのはこの恋塚一里塚のみである。

目印の木は「松」であったが、数年前に枯れて、いまはない。

犬目、鳥沢、猿橋が並ぶこの付近を、昔桃太郎街道と呼んだが、とくに恋塚あたりは起伏も激しく、交通の難所であった。

（塚場一里塚、大柳一里塚、荻野一里塚の項参照）

１７　恋塚部落

１　部落の性格

恋塚は街道設置後に構成された集落と考えられる。犬目と同様現在地より500~600mほど下方から上にでてきたといわれる。「間の宿」の性格を持つ。

２　遺構等

・信玄の隠し湯の源泉か（若恋鉱泉？）
・一里塚
・聖徳太子碑
・大山祇神社
・馬宿
・石畳み道（部落の西端にわずかに残る。）

石畳道は、江戸期の道路舗装の方法であるといわれるが、鶯川宿の上野山、野田尻宿の西端、犬目宿の東端とこの恋塚部落の西端にわずかに残っている。

いつごろ敷石をしたか不明であるが、明治13年(1880)の御巡幸には関係のない道路なので江戸期のものと考えられる。

１８　大庭家について

１　家柄

・屋号「西」（恋塚部落の西端にある。）

・甲州街道の馬宿と農業を生業とした。

・江戸期に組頭、百姓代、近代に２代にわたり村長をつとめる。

２　建築年代

・「居宅を新築す、大工は大森三左衛　宝暦7年(1757)」

（明治27年1月19日撰の年代記）

約230年余りを経ている家屋である。

３　外氣

・萱ぶき入母屋（入母屋破風は比較的小さいが、両入母屋の数少ない例）

・土間表側屋根一部切りあげ（現在は改造されている。）

４　家屋規模

・桁行10,4間×梁行5,5間

５　家作りの特色

・中の間の存在（オクノデイ　トバノマ）鍵座敷への過渡期の形態

・土間表のあかり窓

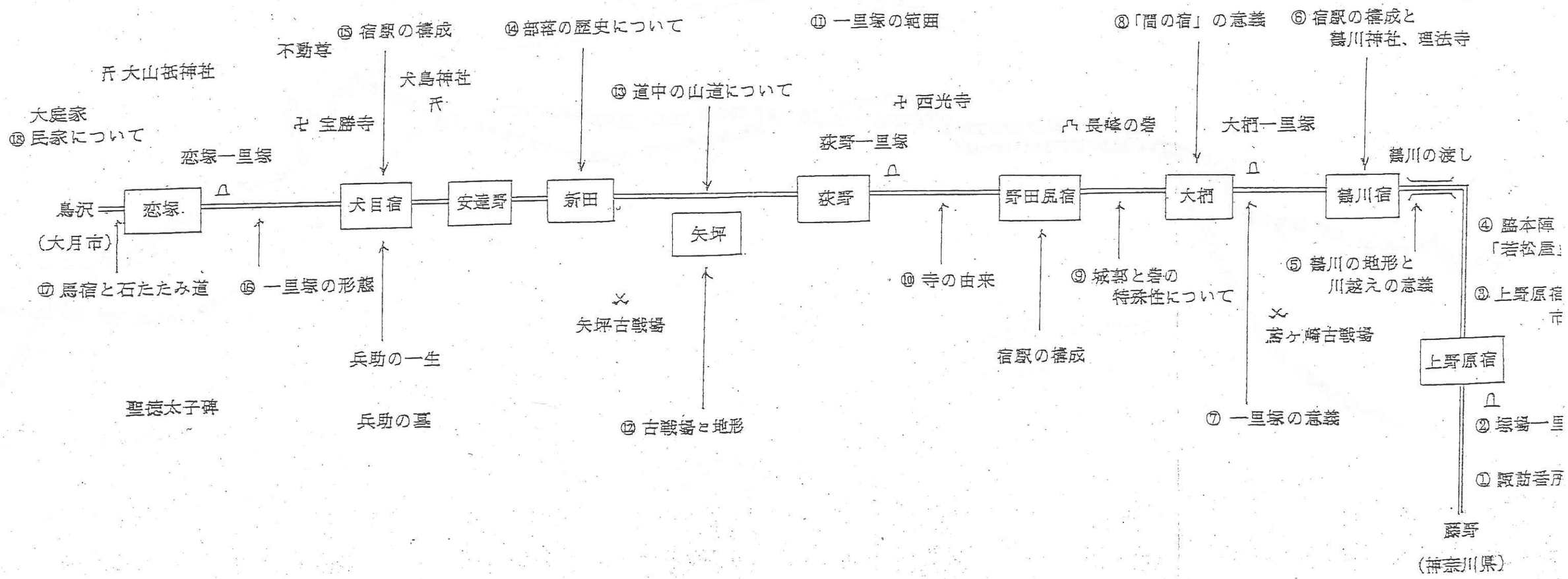
・内馬屋

・土間上の中２階

・屋根裏のつなぎ上の細利用（多層利用）……部内京部の屋根裏構造の基本となる。

旧甲州街道をあるく

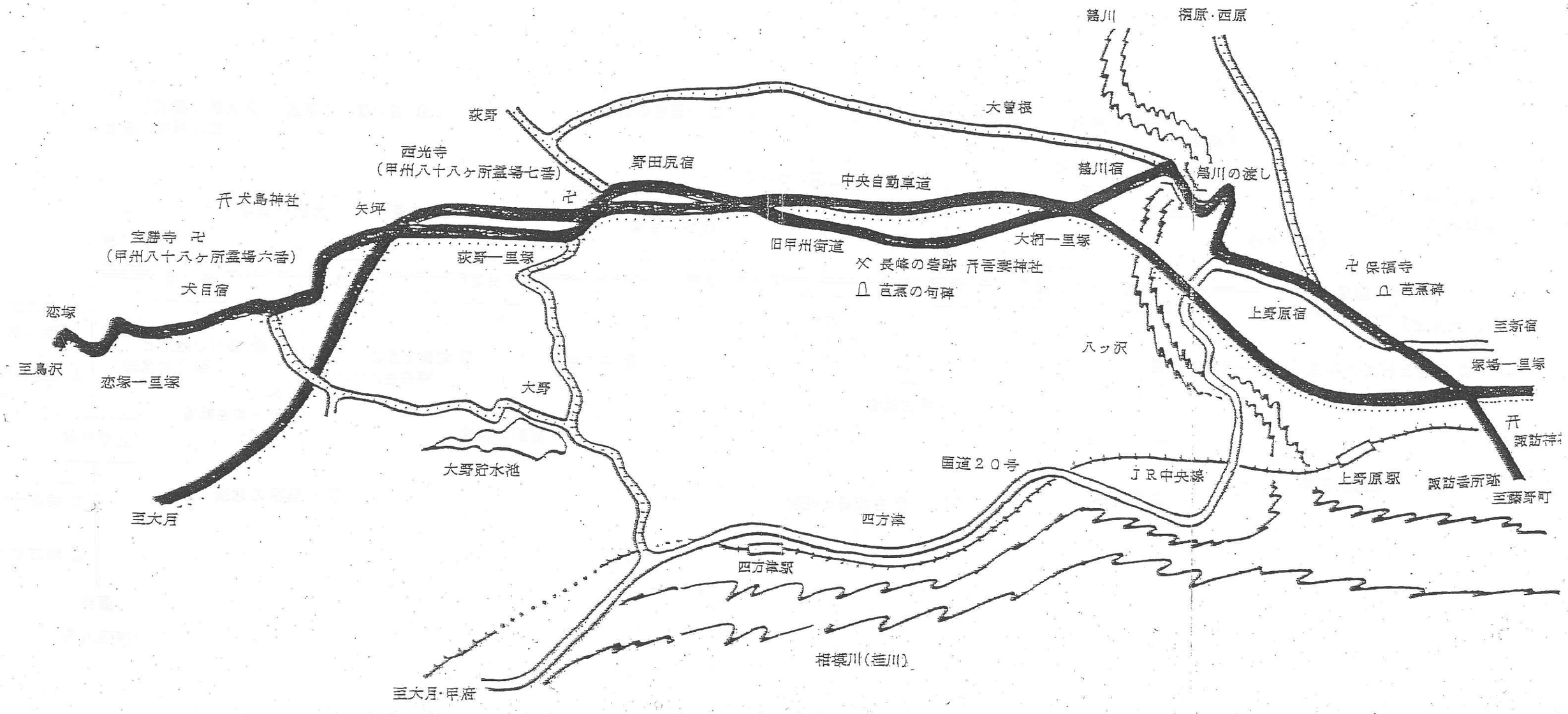
（諏訪から恋塚まで）



旧甲州街道案内図

凡　例

旧甲州街道　　主要道路

中央自動車道　　ＪＲ中央線

国道２０号　　河　　川